

ポジティブサポートの世界(5)

「現実」を「将来」に繋げていく

ということ、姿勢、行為、意味

村田 愛

ポジティブサポートは固定観念や先入観に縛られることなく、「その人」はどんな人かを考えながら、「その人の全体像」を捉え直し、「その人らしさ」の生かされる将来のビジョンを考えていきます。

ここでは、人の全体像を捉え直すことの重要性、そし

てその土台となるポジティブサポートのセッションの継続の意味、そして、現実を将来に繋げていく積極的な姿勢とはどういうものかを示す為に「ジュン君の場合」を紹介します。

ジュン君は養護学校中学部の三年生です。ポジティブ

サポートのセッションを小学部五年生の時から学期に一度のペースで継続しています。参加者は主に本人、御家族、小学部時代の担任の先生や実習生、そして、長年関わっている造形の先生や音楽の専門家です。ジュン君の現在の養護学校の先生にも毎回セッションのお知らせをしているのですが、お忙しいらしく一度参加頂いて以来継続的には参加されていません。

この夏、ジュン君は家族から離れてアメリカで二週間、キャンプ生活を体験しました。このところ、ポジティブサポートのセッションメンバーは、ジュン君が新しいチャレンジを待ち望んでいるように感じ、御両親はキャンプ参加をジュン君に提案しました。そしてジュン君はその提案を聞いて、嬉しそうにそのチャンスに飛びつきました。しかし、養護学校の先生には、キャンプ参加の意味がわからないと言われたのです。

ポジティブサポートをすることで見えてくるジュン君と、学校の先生の見るジュン君。このズレは何を意味す

るのでしよう。ジュン君という人の捉え方の違い、ジュン君の現在、そして現在からの展開に関する考え方の違いの表れと私は考えます。

ジュン君

ジュン君は、年齢のわりには小柄で、笑顔のさわやかな、人に好感を持たれる素敵な中学三年生です。人と関わり、やりとりすることが好きです。相手を真似ることで表現力を掴んできたと思います。幼児期にアメリカで生活していたからか、英語の音や文字の形に興味を示し、映画、音楽、絵本なども英語のものを好んでみます。複数の単語を使って気持ちを表現するわけではありませんが、身体の動き／行動や表現で表現力豊かにその時その時の気持ちを相手に伝えようとします。まわりを良くみてその場にに応じて行動に移すこともでき、協調性が高いと言えるでしょう。彼は穏やかな人で、平和主義です。人に否定的な形で表現することもされることも苦

手で、なんでもお断りするのが苦手な数年前の彼の様子が、私は心配になる程でした。野球のボールなどをコントロール良く投げるのが得意です。そして、芸術的活動やきれいなものや美しい風景にも高い関心を示します。音楽などでもリズムにのせて身体を動かすことも大好きです。

ジュン君の生活（守られた世界）

ジュン君に限らず公立の養護学校へ通う生徒の多くの場合、学校へはスクールバスで通い、スクールバスの停

留所と家の間の行き来は御両親の

どちらかが一緒です。自ずと、行

動範囲・人間関係は、同年齢に比

べて限られたものになってしま

います。

ジュン君が生活の中でほぼ常に

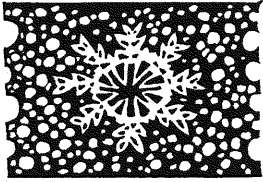
誰かの管理下にあることが御家族

の気がかりになってきました。常に誰かの管理下にあるということは、ジュン君にとっては不自然ではないか、自立していこうとするジュン君の成長にどのような影響を及ぼすのかを考えているようでした。

子どもは、親が知らない時間／世界を持つことを、大人っぽさ／自立の象徴の様に感じることもあります。もう自分は守られるだけの存在ではなく、より多く自分の判断で何かを決定し、そこで結果として伴う責任をも意識することで育てられることもあります。しかし、ジュン君にはそれらの冒険をする機会が限られているのです。

冒険する機会／チャンス

ジュン君の六年生の頃のポジティブサポートのセツシオンでは、「一人でどこかへ出かけたいのではないかと、ジュン君の自立心の芽生えを表すような発言が多く出ていました。そして、セツシオンを継続するに当たってジュン君の自立心の強さが現れ／表れ、さらに中



学二年生の頃には「自分の自由意志で行動したいのではないか」と自由を求めるジュン君の心のさげびのようなものが参加者の発言として出てくるようになりました。

もうすでに力を蓄え、羽ばたくチャンスを待ち望んでいる期間のように私には感じられました。ポジティブサポートのセッションに参加していた人達も、ジュン君が必要としているサポートは、子どもの様に守られることではないと気付いているようです。何か新しくチャレンジしたいことを探すことのサポート、何か新しいことにチャレンジするジュン君のサポートが必要なのだと感じていたのでしょう。

新しい環境で新しい人間関係の中で楽しみを見つけることは、自分を試すことでもあり、冒険です。ジュン君はたくましくなっており、このキャンプはとてもいい機会だと私は思いました。少し困ることがあったとしてもそれをバネにできるのではないか。そして、彼がこれから突き進むのに大きな力となるのではないかと私はわか

わくし、応援したい気持ちでいっぱいでした。

現在からの一歩・夢への一歩

中学二年生くらいになると、ジュン君は学校とのかかわり方を変えたようです。中学三年生になるとジュン君は、学校に行かない日が増えました。体調が優れないという時もあったかもしれませんが。しかし、ジュン君は生活に単調さを感じ、自分の可能性にチャレンジする機会がないと感じ、それを表現していたのかもしれない。もしくは、自分の次に進むべきステップや目指す方向を見出せないばかりか、模索するチャンスも与えられないもんとした感覚を表現していたのかもしれない。この位の年齢の頃には、変化を求め、自分の力を試すような経験ができる環境を欲する時期でもあると思います。

ジュン君が中学二年生の九月、ジュン君にとって大きな家庭内の変化がありました。彼のお兄さんがアメリカ

の高校へ留学したのです。ジュン君は優しいお兄さんと仲が良く、お兄さんは彼のライバルであり、憧れるような存在です。そのお兄さんがジュン君の生活から離れたことは、ジュン君にとって、取り残された思いと寂しさを感じたことでしょう。

現状の生活にはおもしろさを感じられず、活発さが欠けていくジュン君を見ていた御両親が、夏の間アメリカでジュン君がキャンプに参加することを考えたのです。

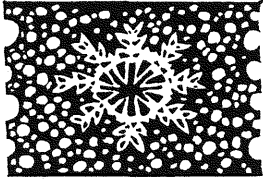
ジュン君のお兄さんが望み、実現したように、ジュン君にも自分を試す機会がある開けた世界へ、と積極的に考え実現させたのです。

積極的に選択肢を見つけ る／創るということ

ジュン君の養護学校の先生には、ジュン君がアメリカのキャンプに参加するにあたって必要書類

を記入してもらわなければなりません。それは、能力的なことやジュン君との関わり方のアドバイス、ジュン君について特徴的なことを記述するようなものでした。その中に明記してある能力に関することは、お母さまのジュン君の評価とは違うところがあつたと聞きました。しかし、私がつとショックだったことは、ジュン君の特徴的な、ここでいう「彼らしさ」の明記に学校の先生方が苦勞なさつた様だということでした。確かにジュン君の全体像、彼らしさ、というものは、それぞれに違うイメージがあるかもしれませんが、しかし、チームを組んでいる担任で話し合えば、自分の生徒の特徴的な部分を考えだすことは難しくなかったのではないかと思わずにはいられません。

そして、先生方は夏休みにアメリカのキャンプにジュン君を送ることについて「何の意味があるのかわからない」と言われたそうです。その質問そのものに私は違和感を感じ、そのことについて考えずにいられませんでし



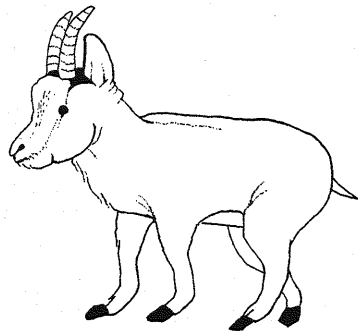
た。

ジュン君の全体像（人格、個性、人間関係、価値観、夢、希望といったもの）から見えてくるジュン君らしさは、どこへ？ ジュン君にとつての現実、生活から見えてくる、ジュン君にとつての必要性はどこへ？ 未来の広がり想像する周りの人の発想の転換とその必要性／意識はどこへ？ このようなポジティブサポートの大切にしていることが全く発想にない発言ではないか、つまり、ジュン君本人の人生の広がりという視点が欠落しているのではないか、と思わずにいられません。

多くの養護学校、特に中学部以降は、就業に向けて作業の訓練をするという姿勢が主流であり、何らかの成果を求めて日々のスケジュールを年間を通して実行している傾向があると思います。例えば、一般通念的という社会で必要とされる具体的な能力を取り上げて、それを訓練して補強し、それをその生徒の成果とする。そして、その生徒の成果は、先生の評価にさえなると聞いたこと

があります。そういつた限られた意味／目的の捉え方をしていると、ジュン君のように楽しみを求めて新しい環境へ行ってみることに価値を置く発想がないのかもしれない。

特に何らかの具体的な成果を目的として新しい環境に参加することを選んだのではなく、楽しめればよい。楽しい中で仲間と一緒に折り合いをつけながら生活することできつとジュン君は成長し、何か大きな自信と勇気を掴んで帰ってくると信じた御両親の感覚（期待、希望、信頼感、夢を託す）が理解できなかつたのかもしれない。しかし、ジュン君の御両親が信じたように、そうした機会を得ることで人の可能性が輝き、人生に広がりが出て、自信を持ってその人が豊かになると私は信じてい



ます。人は楽しみながら何らかの意味を見出し成長するのではないのでしょうか。自分の可能性を試しながら、自分らしく生きていく感覚が持てるのではないのでしょうか。自分の可能性を信じてくれる人がいることで、ちよつと頑張る／新しいことにチャレンジする勇気が湧いてくるものではないのでしょうか。

*

その人の全体像・自分らしく生きていく感覚

ジュン君にはジュン君らしさがあります。ジュン君が生きてきた歴史があります。生きてきただけの経験があり、その間に育ってきた人格、人間関係、価値観、社会性があり、プライドもあります。ジュン君には、ジュン君の夢があり希望があります。

ポジティブサポートは、それらが尊重され、それぞれの人が「自分らしく生きていく感覚」を、その時その時もてる環境づくりを目指しています。誰にでも、自分の

人生に「自分が生きていく感覚」を持つことが必要です。「その人らしく生きる」ということを考えるためには、共に生活を創る人々のその人に対する理解が、「その人の全体像」にできるだけ近づいていくことが不可欠です。それを支えるのがポジティブサポートのセツションです。

夢・希望

ポジティブサポートを継続していると、それぞれの個性を大切にし、その人の全体像を立体的に考えられるようになります。周りの人達も、自然とその人の夢や希望が叶えられる生活を望み、実現することに気持ちも向けられるようになります。私は感じます。人の夢も希望も、時が流れると共に変わります。それらが実際に叶うことよりも、それをまわりに受け入れられることに、人はまず喜びを感じると思えます。そして、現実を肯定的に受け止めることで、現在に充実感を感じ、また一歩進む力が

湧いてくる。つまり、夢・希望を持つことと、それに向かつて歩んでいる感覚が、現在を生きる力になると思います。

ポジティブサポートのセッション

ポジティブサポートの実際の一回一回の場面をセッションと呼んでいます。セッションの行われ方としては、その中心となる人に関わる人達が「その人」と共に集まり輪のように席につきます。そして、ファシリテーターが課題を提示します。その課題は、具体的なその人の現実に根ざしたもので、例えば「〇〇さんが好きなこと・得意なこと」、「〇〇さんが嫌なこと・苦なこと」とか、「〇〇さんが選択していること」、「他の人が選択していること」といったものです。このような課題に基づいて、その人の視点に立って参加者が一人ひとり順番に発言していきます。つまり、セッションの場で、参加者は自分のその人とのかわりや生活を振り返ります。

そして、それぞれの立場で育んでいる関係から見えてくることがや感触を、言葉にしていけるのです。発言の一つ一つは、書記によって書き出されていきます。異なる立場・関係から見た他の人の発言も聴くこととなります。

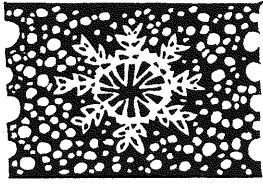
その中で、参加者は新たな視点に気づいたり、自分の考えを捉え直したりし、対象となるその人の全体像が広がりを持って見えてきます。本人も同様です。自分のことをまわりの人達がどのように理解しているかを聴くことで、自分をより理解できる場合もあります。こういったセッションの過程を土台として、その人の現在と将来を繋げ、可能性を生かした将来のヴィジョンを本人と参加者が協力して作り上げていきます。

ポジティブサポートを継続する意味

ポジティブサポートにはいくつかの段階があります。まず、「その人の立場に立ってみる」ことから始まり、そして、その人の置かれている現実を見直すところから

始まります。実際は、その人にとって現在のその生き方がどんなものか、その人にとっての生きる意味における優先順位はどんなものなのか、その人が何を必要としているのか、どうしたらその人にとってより満たされるものになるのかを、その人本人と一緒に考えていくものです。

それぞれの段階においてセッションを継続し、ていねいに行うことに意味があると考えます。その過程でその人から見えている現実が周囲の人達が知っている現実と違うことや、その人との関係性における距離感が見えて



くることも多いようです。できるだけそれぞれが持つ考え方の枠や見方のフィルターをはずし、その人を理解したいと思う気持ちを持ってその人に接することで、すでに関係は変わります。つまり、セッションの中で、すでに関係は

変わっていると考えられます。そうしてそれぞれの中で起きる内的変化が、その人の将来のヴィジョンを描く上で現実的に影響を及ぼしていく原動力になるのです。その例がジュン君の場合です。

ポジティブサポートは、変化を肯定的に捉えて想像力豊かに選択肢を創り、将来のヴィジョンを描き、それを実現していくことをサポートするものです。各セッションで浮き彫りになるその現実とその意味合いを捉え直すことにポジティブサポートを継続する意味があると考えます。時と共に変化し続けるその人の現実を共に認識しながらセッションを継続するということは、それぞれ現実を将来につなげる行為、現実から将来へ共に歩んでいく行為と言えると 생각합니다。

(ポジティブサポート研究室主宰)